

気仙沼・舞根湾に蘇る生き物たちに学ぶモニタリング調査

東大阪市立布施中学校

教諭 中西孝仁

2019年7月20-21日、京都大学名誉教授・舞根森里海研究所所長である田中克先生のもと、気仙沼・舞根湾に蘇る生き物たちに学ぶモニタリング調査に参加させていただいた。調査地である宮城県気仙沼市唐桑町舞根湾は、気仙沼湾の中の支湾で、全くと言っていいほど波が立たない穏やかな海域である。ここでは古くから牡蠣・ホタテガイの養殖が行われ、またその豊かな海を守るために「森は海の恋人」をキャッチフレーズのもとに流域で植樹活動も行われている。2011年3月の東日本大震災では多大な被害を受けるも、津波を恨まずに再び海と共に生きていく気持ちを蘇らせ、結果「防潮堤に頼らず海を見ながら暮らす」ことをされている。本研究グループでは、森の機能、川の機能、干潟・湿地の機能、海の機能をそれぞれ震災直後からモニタリングされており、我々ボランティアは、主に水質調査、桁網調査、フィールドワークに参加させていただいた。

水質調査では、機器を用いた塩分・水温・濁度・溶存酸素濃度などの計測、栄養塩を分析するための採水と底泥のサンプルを採取した。専門的な事項は研究者、院生が行い、我々ボランティアは装置や機材の上げ下ろしやサンプルを容器に入れる作業などの補助を行った。その後は実験室に移動し、サンプルろ過を行った。現場で採取した水サンプルを速やかに処理した。実験室でのフィルターろ過により「溶存態」と「懸濁態」を分離し、それぞれを小瓶に詰めて冷蔵保存した。また桁網調査では、地引き網のような感じで小型の網を曳き、中に入った小魚やエビ、藻などを採取した。採取した生物は密閉袋に入れて大学に郵送、後日に種類や年齢を分析される。我々ボランティアは網の中に入っている魚などの分別作業を船上で行った。

翌日のフィールドワークでは西舞根川・湿地・流域を歩き、森川里海のつながりを豊かにする活動が実際どうおこなわれているかを案内していただいた。森を歩き、川の水に触れることで改めて自然のつながりを感じる事ができた。

こうした2日間の調査を受け、私は勤務校である布施中学校では道徳授業での実践に生かした。

道徳の授業内容に「自然環境を守る」という項目がある。そこでは「よみがえれ、えりもの森」の話が教材として取り上げられている。自然のありがたさに感謝し、自然を守る態度を育むことが目当てである。このえりもの人々の活動は、まさに舞根湾における「森は海の恋人」の活動と同じである。自然とどう関わっていくことが大切か。自分にできることを具体的に考えてみようと思いかけた。その中で、私自身の活動を紹介した。私自身が自然とどう関わって生きているのか、また何を学んで生きているのかロールモデルを示すことで、生徒たちの自然を守る態度を育む一助になればうれしい。

特に今回防潮堤のある場所、ない場所の両方を見学させていただいたことで、東日本大震災における津波を恨まずに再び海と共に生きていくという住民たちの気持ち、結果「防潮堤に頼らず海を見ながら暮らす」ことをされていることが印象に残っている。これらも生徒に伝えることで、「生き方」についても深める事ができた。

生徒たちの感想には、「自然と共に生きていく。人が優先ではなく、自然をきれいに保てる範囲で人が出来ることをする」、「自然を守っていきたい」、「仕事に命をかけておられる。その分、防潮堤をつくらず自然と共存していきたいと思う」、「住む人たちが望んでいるようにするのが良いと思う。自然を自分の身から離さないでもいいと思う」といった内容の感想があった。

こうして教員である私が実際に現場での活動に関わらせて頂くことにより、まずは私自身が「自分事」として環境について問題意識を持つことが出来るようになった。これまでの書籍、論文、映像で見聞きすることはあっても、やはりリアルに勝るものはない。そしてそれを生徒たちに伝える際にも、より真実味のある本気の声で伝えることができる。これは聞く立場において、心を揺さぶられる部分である。

普段の授業においても、単にこなしている授業では生徒も興味をひかない。そこに大人である教員の学びに対する好奇心、食欲さは、生徒の学びへのモチベーションに関わってくる。今後は今回芽生えた生徒たちのモチベーションを高めたまま、行動に移せる手立てを考えていきたい。まずは授業単発で終わるのではなく、SDGsを意識しながら生徒会活動へとつなげていきたい。

